

個人レポート

『第七官界彷徨』に於けるモチーフ

——その意味と役割——

はじめに

尾崎翠の代表作『第七官界彷徨』⁽¹⁾には、実に沢山の暗示的なモチーフが登場する。作者である尾崎自身も『第七官界彷徨』の構図その他⁽²⁾の中で、

この作ではできるだけ説明を拒否し、場面場面の描写で行きたいといふ意図を持つと同時に、一つの場面は、この場面に登場した人物の心理や行動も、この場面に登場した小さい品物も時には人物の会話によつてはじめて登場してきた事柄などをもこめて、何等かの意味で前後の場面と必要な関係を保つたものとしたかつたのです。……

という様に述べており、この作品に於けるさまざまなモチーフには、それぞれに重要な意味が与えられている事が窺える。よつて本稿ではこれらモチーフに特別に託された意味・役割を、作者尾崎翠の他作品などと照らし合わせながら、順に探つて行きたいと思う。そしてその作業を通じて、最終的には彼女、尾崎翠がこの作品で本当に表現したかったものの、

辿り着きたかつた境地を明らかにしたいと考えている。

鈴木 ちよ

一 町子の風貌

(赤いちぢれ毛 バスケット 美髪料 たちの鉄 おかつば ヘヤアイロン)

主人公小野町子は、「赤いちぢれ毛をもつた一人の痩せた娘」である。彼女にとつてこの「赤いちぢれ毛」は、「人々にたいへん遠慮に思」うものであり、自分のコンプレックス以外の何者でもなかった。彼女のコンプレックスの背景には、彼女の祖母の教育の影響があると見える。祖母は町子の上京にあたって、まず最初に「びなんかづらと桑の根をきざんだ薬」を、ちぢれ毛を矯正する「美髪料」として町子の「バスケット」に入れた。そして彼女にこれを使つて癖直しをする事を命じ、更に「都の娘子衆はハイカラで美しいといふことぢや」と漏らす。これはつまり、町子がそのままの姿では美しいとは認められない事、「赤いちぢれ毛」などという一風変わった髪質は世間一般には受け入れられない事を、暗に忠告している。祖母思ひの町子は、そういった彼女の感覚に自らも同化していた。

しかし、兄たちの住む平屋建てで生活を始めて暫く経った頃、彼女の身に大事件が起こる。引越してすぐの頃から町子に断髪を勧めていた従兄の三五郎が、遂に「たちの鉄」を買って来て、彼女に断髪を迫ったのだ。初めは抵抗していた町子であるが、三五郎の巧みな説得に押される形で、結局断髪を決意する。三五郎曰く「かづらの葉でぢれ毛をのばすのは祖母の時代のこのみで、孫たちは祖母のこのみをそのまま守つてゐるわけにはいかなのである」。これは、人知れず詩人を志していた町子の心を勇気付ける発言だったに違いない。尾崎の他の作品に於いても、断髪をする女性は何度々描かれている。例えば『香里から呼ぶ幻覚』⁽³⁾では、断髪の女性が「知的美貌」と称されているし、『瑠璃玉の耳輪』⁽⁴⁾には、男装もこなす活潑な断髪の女探偵が登場する。『アツプルパの午後』⁽⁵⁾でも、兄を議論でやり込める勝気な妹が断髪をしたエピソードが挿入されている。

髪を切られた町子は、初めこそ恥ずかしがって野菜風呂敷をかぶったり、ボヘミアンネクタイを巻いたりしていたが、その内頭に何も巻かなくなり、家族のみならず隣人や家主にも平気で「おかっぱ」を晒せるようになった。これは町子が当時の世間的常識や社会通念に対して、一歩隔てた領域、自分の夢を叶えるための自由で独創的な立ち位置を手に入れたという事であろう。彼女にはもはや、祖母の体現する「古き良き日本の伝統」に従う必要はない。「おかっぱ」(新しく独特な感性)にも、それを維持する「ヘヤアイロン」(言葉・思想)の扱いにも慣れた町子は、ある種の哀愁と共に「美髪料」(旧慣習)を「バスケット」(不用になった物の収集箱)の中にしまうのである。

二 三五郎の存在

(ピアノ マドロスパイプ コミックオペラ 楽譜)

さて、町子の自己改革に一役買った従兄の三五郎であるが、彼が町子に与えた影響はそれだけに止まらない。彼と町子とは一助・二助たちと異なり、親族とは言え結婚も出来る間柄である。それだけに二人が共同生活をする中で、次第に淡い恋のような感情を深めていったのも当然のように思える。三五郎は先の断髪のエピソードからも分かるように、非常にユニークで積極的な男性である。但し、彼には多分 to ightly 加減でだらしない所があり、音楽予備校の先生に笑われたり褒められたりする度に何か(マドロスパイプ、ボヘミアンネクタイ、ヘヤアイロン)を購入してしまったり、そのために町子に借金をしたりしている。町子のために購入した(結果的にそうなったとも言えるが)ボヘミアンネクタイやヘヤアイロンは良いとしても、「マドラスパイプ」(でかくて邪魔な上にろくに使用していない)は、彼三五郎のいい加減さの象徴として最たるものであるように思う。おまけに町子が見抜いたように、「佐田三五郎の感じかたには、すべてのものごとにくらかの誇張があつた」。つまり大袈裟という事である。

そんな彼ではあるが、「ピアノ」を愛する音楽家であるという一点に於いて、詩を愛する町子と意気投合する。二人はしばしば「ピアノ」を挟んで会話をし、また「コミックオペラ」を共に歌う事によって、関係を深めて行く。象徴的な台詞がある。歌い終わった二人が会話をする場面で、音程を狂われないようにぼろピアノを弾くのをやめたらと提案する町子に、三五郎は次のように言う「あればしぜん鳴らすよ。女の子が

近くにゐるのとおんなじだよ」。これは遠まわしな愛の告白に相違なく、その他にも、彼は幾度か町子に接吻をしたりしている。加えて彼は作中唯一町子を「町子」と呼ぶ人物であり、年頃の町子にとって、三五郎は単なる「従兄」を超えた存在であつた筈だ。

しかし、二人の淡い恋は隣人の出現により脆くも崩れ去る。三五郎は隣家の少女に次第に心惹かれてゆく。三五郎と少女、二人の關係が決定的なものとなつたのは、彼女が三叉を使い町子を通して、三五郎に片恋の詩の「楽譜」を贈つた時であろう。音楽家の彼にとつて、「楽譜」のラブレターはとても心に迫るものだつたに違いない。対する町子は常に無口で、何を考えているか今一つ分からない所がある。思いを具體的な形にしてぶつけるのは、いつも彼の方だつたからだ。ここに、受け身な町子の初恋が終わつたのである。

三 各々の恋愛

(蜜柑 癖 つるし柿 失恋 ボヘミアンネクタイ 脇蒲団 くびまき)

町子と三五郎の淡い恋以外にも、この作品中には沢山の恋愛が登場する。そして興味深い事に、そのいずれもが結局は「片恋」「失恋」に終わっているのである。一助は柳浩六と患者の女性を争っているし、二助は少し前に下宿先の女の子に振られた。三五郎も上手く行きかけた隣人の少女と別れる羽目になるし、町子は三五郎に軽度の失恋、柳浩六に片恋をする。そしてそういった場面にも色々なモチーフが現れる。

まず「蜜柑」。これは端的に言つて三五郎の恋心を表している。町子は兄たちの平屋に初めて来た時、この家のみかんを見て「それにつけても、この家の生垣は何と発育のおくれた蜜柑であらう」との感想を抱い

ている。これは三五郎がまだ恋というものを知らない状態を指す。續けて町子は「後になつてこの蜜柑は、驚くほど季節おくれの――略――地蜜柑となつた」と述べ、三五郎が後に隣人の少女に恋をする事を暗示する。しかもその恋が「すつぱい」青臭いものであつた事も指摘しつつ。

しかし、三五郎の想いは最初従妹の町子に向けられる。三五郎が町子の髪を切つた日、そして三五郎が町子に接吻をした日、彼は去り際彼女に「しかし、垣根の蜜柑もいくらうまくなつたよ。おやすみ」と言う。これは彼が次第に町子を、「従妹」ではなく「女」としてみなし出した事を表す台詞である。けれどもその後日、三五郎は何か食べ物はないかと町子に催促した際、それならば蜜柑をと思つた町子に、「蜜柑は昨夜のうちに飽食した――略――どうも蜜柑の中毒にかかるにちがひない」と告げ、他のものを欲する。自分の行動について反応の無い町子に対し、徐々に不満を募らせている事が窺われる。

そして、三五郎の前に隣人の少女が現れる。町子と異なり、自らの氣持を素直に伝えて来る少女に、彼は心惹かれて行く。それから二人は、一緒に蜜柑を食べる習慣を持ち始める。これは非常に象徴的で、尚且つ特筆すべき出来事である。何故ならば、町子との關係に於いては、蜜柑を食すのは三五郎ただ一人であつたからだ。これは彼一人が先走つていた二人の關係を如実に表している。それに引き換え、少女と三五郎はあくまでも共に食べ、しかも一つの蜜柑を「半分づつ」にしている。

しかしながら、三五郎の恋も周囲の（主に少女側の）反対により、敢え無く終焉を迎える。二人は蜜柑を六度ばかり食べて別れてしまつた。少女が去つた後、家の周囲の蜜柑という蜜柑は、全て家主の老人の手によつて収穫されてしまう。町子はその様子を「そして私の家庭の周囲には一粒の蜜柑もなくなり、ただ蜜柑の葉の垣が残つたのである」と述べ

る。三五郎の恋の情熱はすっかり消え失せてしまった。

次に、これらの事を町子の側から見て行こうと思う。まず彼女が三五郎の接吻を受けた時、彼女はそれを「十四の三五郎が十一の私に与へた接吻とあまり變りのないものであつた」と感じる。彼女にとって三五郎は單なる従兄を超えた存在ではあつたけれども、そう一足飛びに異性として付き合いたい相手ではなかつたのである。彼女はそういった気持ちで「つるし柿」に託している。最初の接吻のきつかけとなつたつるし柿は、三五郎のみずみずしい「蜜柑」とは異なり、老成した落ち着きを見せるものである。町子の三五郎への想いも、そういった肉親の愛情に近いものであつたらう。町子が初めて平屋を訪れた時も、二人は祖母の持たせてくれたつるし柿を食べた。その「山国の匂ひのゆたかなもの」は、遂に二人に兄弟の領域を越えさせなかつたのだ。

そうこうする内、三五郎は隣の少女に心奪われてしまう。町子はショックと悲しみを隠せない。しかし、彼女はなんとか「失恋」の痛手から回復しようとする。その過程が三五郎から貰つた「ボヘミアンネクタイ」の扱いの変化に表れている。これは最初町子の部屋の装飾品として飾られていたが、断髪後は頭を隠すために頭巾として使用された。この頃は、町子と三五郎は言うならば「相思相愛」の関係にあつた。ボヘミアンネクタイを町子の頭に綺麗に巻くのは、三五郎の役目だったのだ。だが、隣人が越して来た後、三五郎は町子にヘアアイロンを買い与え、自分で髪を整えるよう促す。町子がヘアアイロンの扱いにすっかり慣れた頃、彼は隣人の少女と恋に落ちた。傷心の町子は、もはや用無しのボヘミアンネクタイを、裁断し「脇布団」に作り変える。しかもそれを買ひ与えてくれた三五郎にはなく、自分と一助のために。「片恋」に苦しむ一助の姿は、町子に「同族の哀感」を起こさせたのである。ところで、

何故「脇布団」なのであろうか。それは勿論、頼杖について物思いに耽るために用いるのであろう。

しかし、苦惱する町子にも遂に本当の恋が訪れる。それは三五郎の蜜柑がすっかり無くなつてしまつた晩秋のことであつた。彼女が恋するのは一助の同僚の柳浩六であり、彼女が身内以外に恋心を抱いたのは、恐らくこれが初めてであつたと思われる。浩六は町子がようやく克服し始めたコンプレックス「赤いちぢれ毛を、異国の女詩人（大変な佳人）に似ていると讃える事によつて、彼女の心の中の特別な位置を占める人物となる。そもそも町子にとつて、三五郎との恋は、彼の「音程の狂つたピアノ」のように調子外れで見当違いなものであつた。「くびまき」を買つてくれと頼んだのに、たちの鉄とボヘミアンネクタイを買つて来て、その後も頼みもしないヘアアイロンなどは買つて来るものの、肝心の「くびまき」は一向に与えてくれない。三五郎に、長い時間がかつても最後まで与えられなかつたものを、柳浩六にはもの数時間で買つて貰うのである。詰まるところ、「くびまき」とは確かな安定感のある（襟元をすっぽり暖かく包むくびまきの様に）大人の愛情の事であらう。けれどもその柳浩六も、一助と争つていた患者の女性は諦めたものの、すぐに遠い地に行つてしまい、町子は切ない片恋を味わう羽目になる。つまり結局の所、この家は「失恋」「片恋」に取り憑かれているのである。どうしてもそこへ落ち着く様に仕組まれていると言つてもいい。そういう中、唯一「恋愛」が成立しているのが植物である「薔」であるというのが、非常に逆説的で風刺的である。作者尾崎翠はこれら一連の失恋劇を、世間一般の「恋愛」のパロディとして描き出したのではないだろうか。

四 「女の子」の町子

(チヨコレエト玉 女の子 塩せんべい どうらやき)

主人公町子には常に「女の子」の符号が与えられている。彼女の周りの男たちは、自分たちより幼く、保護するべき存在として町子を「女の子」と呼ぶ(二助も二助も浩六も)。唯一の例外の三五郎は恐らく町子と歳が近く、立場もそう変わらないのであろう。

町子が周りの男性たちに「女」ではなく「女の子」として扱われていることは、彼女に与えられる食べ物を観察してみると、良く分かる。例えば、二助の部屋の掃除中、誤って実験装置を壊してしまい、泣き出す町子に、彼は「どうも女の子が泣きだすと困るよ。チヨコレエト玉でも買ってきてみようか」と提案する。泣いている女の子にはチヨコレエト玉が有効だと判断した訳である。一助や三五郎には、時としてかなり厳しい物言いをする彼が、町子には常に優しい。それは反面、彼にとって町子は議論をしたり、意見を交換したりする相手ではない事を表す。

また柳浩六の家に、町子が一助の使者として行った時、夕飯がまだでお腹のすいた彼女のために、浩六は「何かうまいもの」を買ってこさせる。与えられたのは「塩せんべい」と「どうらやき」であった。普通の感覚では、夕飯時に来客にこれらのものは出さないように思われる。これも町子が「女の子」である事を、知らず知らず意識した上の行動である。「チヨコレエト玉」「塩せんべい」「どうらやき」…。「女の子」町子はこれらお菓子のように、甘くて現実味の無い、副次的存在として扱われるのである。

しかし、密かに詩人を志す町子にとって、こうした対応はかえって都

合の良いものだったかも知れない。男たちは、彼女を「女の子」として見ていたので、警戒する事無く、自分たちの学問、思想をあげつばろげに晒すことが出来たのである。事実、彼らは町子の前で、しばしば独語的な発言をして(他の人物の前ではしない)、さまざまな本音を漏らしている。町子は持ち前のクールな視点により、兄たちを思いのほか、冷静に観察している。彼女は饒舌な男たちと異なり、黙して多くを語らないが、「女の子」という便利な隠れ蓑を手に入れた彼女は、この「変な家庭」の中を、自由奔放に動き回り、様々な感情・思想・表現を手に入れる事が出来た。「女の子」町子は、意外にしたたかな人物であったと言えるだろう。

五 「第七官」の探求

(第七官 分裂心理学 音楽 こやし 風や煙や空気の詩)

町子の夢は、「人間の第七官界にひびくやうな詩」を書く事であった。しかしながら、彼女はその実、「第七官」というものがどんなものなのか知らなかった。そこで、彼女は自分の共同生活の目的の第一に、「人間の「第七官」の定義を見つける」という事を掲げたのである。

彼女の「第七官」の探求には、兄たちの勉強が役に立った。まず一助について。町子は『ドツベル何とか』(三五郎が言うには)に代表される彼の蔵書を読み、分裂心理学⁷を学び、「分裂心理学のやうにこみいつた、霧のかかった詩を書かなければならないであらう」と感じる。そして町子は、二助の「荒野山裾野の土壌利用法について」という二十日大根の研究の序文や、「肥料の熱度による植物の恋情の変化」という蘚の研究の論文の、熱心な読者でもあり、彼の植物実験に深い関心を寄せてい

た。それから三五郎がピアノをひいてオペラを歌う時には、町子も「詩集を抽斗にしまつて三五郎の部屋に出かけ、二人でコミックオペラをうたつた」のである。更にこれら二つが重なると、例えば三五郎のピアノの音と二助のこやしの臭気が合わされると、こやしはピアノの「哀しさをひとしほ哀しくした」と町子は感じ、「第七官」といふのは、二つ以上の感覚がかさなつてよびおこすこの哀感ではないか」と考えた。

以上のように、町子は兄たちの勉強から「第七官」の定義付けのヒントを沢山得ていたのであるが、所詮は目指している場所が異なる別の学問であるため、そこに一つの限界が存在した。彼女に一番明確な形での「第七官」を、すなわち詩の世界に於ける「第七官」というものを教えたのは、実は柳浩六であつた。

彼は町子に、異国の女詩人の写真を見せ、彼女がいつも「風や煙や空気の詩」を書いていた事を告げる。「風や煙や空気の詩」という言葉の意味する所は、男であるとか女であるとか、人間であるとか植物であるとかの、些細な区別や決まりごとに囚われない、真に自由で創造的な境地ではないかと思う。本作の五年程前に執筆されたと考えられている『詩「風の夜空」』⁽⁸⁾には、詩を書く病身の女性が登場する。主人公の少女は隣人であるこの女性の事をこう語っている。

お姉さまは、詩人でしたのよ。そして空の詩ばかり書く。

空の詩人ね。……春夏秋冬の空の明るさ、暗さ。朝夕に移る空の色。雲の形。海と山との空の雲の荒さ、柔さ。……それから、雨空、虹、夜の空等、慈しみの中に敏感に詩にしていらいつしやいます。……

この女性は作中ずつと書きたくて書けなかった「風の空の詩」⁽⁹⁾を、やつと書き終えた所で突如息絶えてしまう。真実の思いを詩に書くという事は、それこそ命懸けの作業なのである。そしてその作業によつて創りだされる世界こそが「第七官界」なのである。

町子は自分と同じ「赤いちぢれ毛」を持つ異国の女詩人に大いに憧れて、自分も「風や煙や空気の詩」を書こうと努める。しかし、彼女が書くことが出来たのは、哀感のこもった恋の詩だけであつた。前述のように町子は、断髪を通して祖母の体現する古い価値観・習慣を断ち切り、更に同時に「女の子」という免罪符を手に入れる事によつて、自由気ままに動き回り、郷里では不可能に近い様なさまざまな経験を積んで来る事が出来た。しかしながら、それ故に彼女の作る詩は、未だ「女の子」の領域を踏み越えるものにはなつておらず、感情の揺れもただ「恋」のみに限定されてしまつてゐる。「風」や「煙」や「空気」を捕らえるには、何よりもまず人間という生物に付された区別——性差を自力で、且つ小細工無しに超えなくてはならない。

結論から言うならば、「第七官」を手に入れるために、「人間の第七官界にひびくやうな詩」を書くために、町子は近い将来必ずこの居心地の良い家を出て行かなくてはならなくなるだろう。そして憧れの女詩人のように、ひっそりとただ一人きりで「屋根部屋」に住むようになるのである。——これは町子がまだ、少女らしい甘やかな夢の中で昼寝をしていた頃の物語である。

おわりに

一連の作業を終えてみて、この『第七官界彷徨』という作品の中に、作者尾崎翠が如何に周到に、且つ念入りにさまざまなモチーフを盛り込

み、仕掛けていたのか思い知らされた気がする。どんなに小さなモチーフにも、ある一定の役割と意味を与え、それらが作品の中で互いにリンクし合い、更にその前後にも、新たに特別な意味合いを持たせるようにしている。実に見事なものだと思う。それでいて作品の本筋自体の魅力も失っていない。多くの論者が主張するように、この長編それ自体がまさに「第七官界」の現出なのだと断言してしまっても差し支え無いだろう。

注

- (1) 初出は一九三一年二月―三月号『文学党员』（二巻二号―三号、アトラス社刊）で全編の約七分の四を、前・中編として発表。次いで同年六月発行の『新興芸術研究』（二輯、板垣鷹穂編、刀江書院）に全編を発表。尚、本文中の引用には『定本 尾崎翠全集 上巻』（一九九八年九月、筑摩書房）を使用した。
- (2) 一九三二年六月発行の『新興芸術研究』（二輯）に、「第七官界彷徨」の全編とともに掲載。尚、本文中の引用には『定本尾崎翠全集 上巻』（一九九八年九月、筑摩書房）を使用した。
- (3) 松下文子所蔵の創作稿。文子によって中央公論社に持ち込まれたが返却された。執筆は一九二七年二月頃。筆名は丘路子。
- (4) 『定本 尾崎翠全集 下巻』（一九九八年十月、筑摩書房）収録。
- (5) 一九二九年八月号『女人芸術』（二巻八号）に発表。
- (6) 翠のドッペルゲンガーへの並々ならぬ興味・関心は、この後の『こぼろぎ房』収録。

嬢（一九三二年七月号『火の鳥』六巻7号、栗原潔子編、火の鳥編輯所）へと繋がって行く。また、この「こぼろぎ嬢」は町子の後の姿であるという論も多く、興味深い。

- (7) この言葉は、フロイト理論を応用した作者オリジナルの造語である。『「第七官界彷徨」の構図その他』

- (8) 松下文子所蔵の文箱の中から発見された草稿の一つ。一九二六年に書かれたと見られる。『定本尾崎翠全集 上巻』（一九九八年九月、筑摩書房）収録。

- (9) 「風の空の詩」の内容は次の通り（以下『詩「風の夜空」』より抜粋）。

風の夜空

日の終わり、世の終りか、今宵。

空は、遂ひに、狂ひぬ。

涙の六月、苦悶に堪えて、

空は、遂ひに、狂ひぬ。

夜を、引き裂き、

闇を、引き破る、

狂乱、

尖光を、ひらめかして、

地を刺し、己を衝く、

狂乱、

風の……………

参考文献

- 戸塚隆子 「尾崎翠の作品解釈―『第七官界彷徨』『歩行』『地下室アンントンの一夜』を中心に」（『日本大学理学部（三島）研究年報』三十号 一九八二年）
- 岸千晶 「尾崎翠論―『第七官界彷徨』をめぐる」（『日本文学ノート』十八号 一九八三年二月）
- 加藤幸子 『尾崎翠の感覚世界』（創樹社 一九九〇年七月）
- 生方智子 「女の子」のファミリー・ロマンス―尾崎翠『第七官界彷徨』の世

- 界」(『明治大学日本文学』二十四号 一九九六年六月)
- 溝部優美子 「第七官界彷徨」―町子の〈ひとつの恋〉(『国文目白』三十六号 一九九七年二月)
- 近藤裕子 「匂いとしての〈わたし〉」―尾崎翠の述語的世界」(『日本モダンリズムの領域』(『日本近代文学』五十七号 一九九七年十月)
- 水田宗子 「ことばが紡ぐ羽衣 女と表現」―尾崎翠の地を訪ねて」(『現代詩手帖』四十号 一九九七年十月)
- 菅本康之 「光源としての唯物論的ユーモア」―尾崎翠と花田清輝」(『昭和文学研究』三十六号 一九九八年二月)
- 野坂昭雄 「尾崎翠『第七官界彷徨』論」―「非正常心理の世界」をめぐる」(『日本文芸論稿』二十五号 一九九八年三月)
- 森澤夕子 「尾崎翠の両性具有への憧れ」―ウィリアム・シャープからの影響を中心に」(『同志社国文学』四十八号 一九九八年三月)
- 稲垣眞美・高橋英夫 「対談 復活! 尾崎翠」(『ちくま』三三一号 一九九八年十月)
- 小谷真理 「翠幻想」―尾崎翠のメタ恋愛小説」(『日本文学』四十七号 一九九八年十一月)
- リヴィア・モネ: 竹内孝宏訳 「自動少女」―尾崎翠における映画と滑稽なるもの」(『国文学解釈と教材の研究』六五三号 二〇〇〇年三月)
- 峯村至津子 「女の髪と非日常世界」―『第七官界彷徨』に於ける町子の髪役割」(『女子大国文』一二九号 二〇〇一年六月)
- 三輪初瀬 「第七官界彷徨」試論―町子の彷徨と「第七官」」(『国文目白』四十一号 二〇〇二年二月)
- 明石亜紀子 「尾崎翠の文学世界―その映像的文体を中心に」(『日本文学誌要』六十六号 二〇〇二年七月)